

世代超え「昔」で笑顔に



まだまだ人生を振り返る年ではない。だけど、回想の魅力はよく知っている。昨年春、名古屋芸術大三年の田坂美夢さん（三）は、地元北名古屋市六ツ師の回想法センター（北名古屋市六ツ師）を紹介する小冊子を作った。

センターの卒業生たちが開いた作品展の一角に置かれた。全六で活動内容のほか、センターに通う高齢者たちの幼少時代の回想も載せた。古い家電の写真を添え、思い出を書いてもら

えるような欄も設けた。センター職員からも分りやすいと好評。用意した数十部はすぐになくなった。田坂さんは二年生の冬、初めてセンターに来た。地域課題の解決法を考える授業の一環で、学生三十人ほどで見学した。職員から認知症予防など回想法の効果を知った。ただ、堅めの説明には物足りなさをP

Rした方がいいのでは、自分で見てみようと思う。田坂さんは、テレビや冷

蔵庫が憧れだったという昭和、黒電話などが並ぶ昭和日常博物館を、センターの卒業生五人と一緒に訪れた。同館も、懐かしいものを見ながら思い出を語る回想法に取り組み。隣にいる人たちは展示を見たり、口々に話した。ちゃぶ台が置かれ、昭和の居間を再現した一室。ある男性は子どものころ、家族で食卓を囲んだ時間を「しゃべりながら食べると怒られた」と振り返った。テレビを見ると、それぞれに「自宅になかったので近所の人に集まっていた」「回転式のチャネルがよく壊れた」。おしゃべりは尽きなかった。

田坂さんも、子どものころから人を楽しませるのが好きだった。名古屋芸大を選んだのも、芸術を通じて人をつなげる企画に興味があったから。入学後は、廃材を利用したアートイベントなどを開いてきた。自分が感じたセンターの面白さを、もっと多くの人に知ってもらうため、協力しようと決めた。

センターに足を運ぶたび、「学生さん、よう来たね」と迎えてもらい、居心地のいい場所になった。小冊子制作などに続き、今月末にはセンターでワークショップを開く。学生と高齢者が互いに撮り合った写真に落書きをする。世代を超え、会話を笑顔が生まれる光景を想像し、今からわくわくしている。

（猿渡健留）

＝終わり

（次回から「二宮スケート場」編です）



自身が作った冊子を手話で話す田坂さん＝北名古屋六ツ師の回想法センターで